九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

山上正義訳「阿Q正伝」について ： 【国際プロレタリア叢書】（1931）と『大魯迅全集』（1937） の二種の翻訳 ： （附：耿庸「胡風宛書簡」発見と楊逵の使用した版本についての補足）

秋吉, 收
九州大学大学院言語文化研究院 ： 教授

https://doi.org/10.15017/4736684

出版情報：言語文化論究. 47, pp.51-63, 2021-10-31. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

山上正義訳「阿Q正伝」について

――【国際プロレタリア叢書】(1931) と『大魯迅全集』(1937) の二種の翻訳――

（附：耿庸「胡風宛書簡」発見と楊逵の使用した版本についての補足）

本稿を中国史研究家、故横地剛氏[1]に捧げる。

秋　吉　　収

一、山上正義の「阿Q正伝」翻訳について

「阿Q正伝」翻訳については、前稿「一台湾作家の訳した魯迅――楊逵編「“中日文対照”中国文芸叢書」『阿Q正伝』をめぐって」[2] に、丸山昇氏の説明を引用した。以下抜粋する。（下線は引用者による。以下同じ。）

> 日本における「阿Q正伝」翻訳の歴史、及び1937年版『大魯迅全集』（改造社）に収める「阿Q正伝」が山上正義の訳になることは、丸山昇著『ある中国特派員　山上正義と魯迅』（1976年、中央公論社）に詳しい。
>
> （1936年）十月十九日に魯迅が死に、山上は『改造』十二月号に「魯迅の死と広東の想出」を書いた。これより先、三五年六月には佐藤春夫・増田渉訳の『魯迅選集』が岩波文庫の一冊として出、日本の読書会にも、ようやく魯迅の名が知られるようになっていたので、彼の死は各新聞に報じられたほか、各新聞・雑誌で特集をしたり、関係者の思い出、感想などを載せたものが多かった。（中略）このころ改造社は、『大魯迅全集』の計画を進めていた。同社からは三二年に井上紅梅訳で、「吶喊」「彷徨」の二小説集を内容とした一冊本を『魯迅全集』として出していたので、大をつけたのである。『阿Q正伝』には、山上の訳が採用されることになった。それは彼にとっても嬉しいことだったらしく、日記にも「魯迅全集の阿Q正伝は自分のもの採用に決す」と書きとめている[3]

なお、山上正義は林守仁の筆名で1931年には既に該訳を発表していた。1931年10月に四六書院より出版された【国際プロレタリア叢書】『支那小説集　阿Q正傳』である。ここで言う山上の訳「採用」とはそのことを指す。

丸山氏がここに挙げる二種類の山上訳について、筆者は前稿に次のように記した。

試みに1931年（【国際プロレタリア叢書】版）と37年（『大魯迅全集』版）の山上訳文を比較して

みたが、大きな異同はないように見える。待考。

前稿執筆時は、行論と直接に関係しなかったこともあり、この二種類の翻訳にはざっと目を通した程度であったが、いつか確認したいと心に引っ掛かっていた。今回は、まずその宿題を提出したい。

結論から述べれば、前稿の「推測」は事実とは異なり、二種の翻訳間の異同は大ありで、山上は六年の時を経た『大魯迅全集』収録に当たって、丁寧にまた大幅に訳稿を改訂していたことがわかった。丸山氏の曰く“それは彼にとっても嬉しいことだったらしく、日記にも「魯迅全集の阿Q正伝は自分のもの採用に決す」と書きとめている”、その意気込みは、山上の所為に正に顕著であった。

以下、実際に両者の違いを瞥見したい。すべてを挙げることは到底できないので、ここでは幾つかの場面を取り上げて、比較対照する[4]。「第一章　序」「第二章　勝利の記録」「第四章　戀愛の悲劇」「第七章　革命」「第八章　革命に参加させず」の各場面である。

	A、【国際プロレタリア叢書】 『支那小説集　阿Q正傳』 1931年10月、四六書院	B、『大魯迅全集』 1937年２月、改造社
「第一章 序」	总而言之，这一篇也便是“本传”，但从我的文章着想，因为文体卑下，是“引车卖浆者流”所用的话，所以不敢僭称	
	だから結局、私が**これから**書かうとする**もの**が阿Qの本傳となるわけ**である。たゞ**私の文章から見ると、**この**文體**の卑俗なことは、恰も八百屋の小僧か酒屋の御用聽きでも**使ひそうな言葉**ばかりであつて**、到底本傳などと大きなこと**が**云へないのである。	だから結局、私が**今から**書かうとする**此一篇**が、阿Qの本傳となるわけ**だが、しかし**、私の文章から見ると、文體**が下卑てゐて、ボテ賣などの**使ひそうな言葉**だから**、到底本傳などと大きなこと**は**云へないのである。
「第二章 优胜记略」	假使有钱，他便去押牌宝，一堆人蹲在地面上，阿Q即汗流满面的夹在这中间，声音他最响： “青龙四百！” “咳……开……啦！”桩家揭开盒子盖，也是汗流满面的唱。“天门啦……角回啦……！人和穿堂空在那里啦……！阿Q的铜钱拿过来……！”	
「第二章 勝利の記録」	**彼は**懷中に金**さへ**あれば**よく牌九を賭けに**出かけた。**地上に圓座を作つて**蹲んでゐる一團の人**群れの中に割込んで行つては、彼**は顔中汗ダラダラになつて**やつた。阿Qの**聲は**その中で**一番**高かつた。 『青龍で四百文**行**つたァ！』 『**あゝあい**、あける**よう**』**賭場のおや**は**小唄口調で牌の上の**蓋を除けながら、これまた額**は**汗**ダラダラだつた。** 『天門だァ！　角**張りは勘定なしだァ**……。と穿堂は**空**だァ……。阿Qの錢は此方い**寄越してく**んろ……』	**若し**懷中に金**が**あれば**彼は押牌實に**出かけ**て行つ**た。**一團の人が地上に**蹲んでゐる**。阿Q**は顔中汗ダラダラになつて**そのまん中に挾まり**、聲は**彼のが**一番**好く響いた**。 『青龍で四百文**張**つたァ！』 『**ああい**、あける**ぞ**う』**堂元**は**壺皿の**蓋を除けながら、これ**も**また額**を**汗**みづくにして唱ひ出した**。 『天門だァ！　角**がへし**……。**人**と穿堂、空は**そこ**だァ……。阿Qの錢は此方い**呉**んろ……』
	昏头昏脑的一大阵，他才爬起来，赌摊不见了，人们也不见了，身上有几处很似乎有些痛，似乎也挨了几拳几脚似的，几个人诧异的对他看。他如有所失的走进土谷祠，定一定神，知道他的一堆洋钱不见了。赶赛会的赌摊多不是本村人，还到那里去寻根柢呢？ 很白很亮的一堆洋钱！而且是他的——现在不见了！	

	A、【国際プロレタリア叢書】 『支那小説集　阿Q正傳』 1931年10月、四六書院	B、『大魯迅全集』 1937年２月、改造社
	頭**もグラグラする様な大騒ぎで**、彼はやつと**逃げ出した。もう**賭場**がどうなつてゐるか、誰がどうしたのか何も彼も分らなかつた。たゞ、自分の身體が五六個所ヅキヅキうづくだけが分つた。どうも五六個所は**殴られたり蹴られたりしたらしかつた。四五人の男が彼を怀しそうに眺めてゐた。彼は**何か紛失した様な氣がして**産土神の**方に歩いて行つた。漸くわれに歸つて氣がついた時には、あんなに勝つて山の様に積み上げてゐた大洋が彼の懐の中に一枚も無かつた。**村のお祭にやつて來る**賭場の座元は、大概他郷の者で未荘**の者ではなかつた。今更何處**に尋ねて談判しようもなかつた。** **銀灰色**にギラギラ輝い**て、小山の様に積み上げられてゐたあ**の大銀貨！　しかもそれが阿Qの所有**であつた。それが**現在**は何處にも見當ら**ないのである。	頭**がボーとして大分しばらくしてから**、彼はやつと**手を突いて起きあがると**、賭場**はなくなつてゐて、人も見えない。からだには幾箇所も痛みがあり、どうやら幾つも**殴られたり、蹴られたりしたらしかつた。四五人の男が彼を怀しそうに眺めてゐた。彼は**ものたらなさうに**、産土神の**祠堂に入つた。氣をしづめてみると、一山の銀貨のないのがわかつた。**村のお祭にやつて來る**大道賭博は大抵この村**の者ではなかつた。今更何處**へ行つて、根柢を尋ねよう？** **眞白**にギラギラ輝い**た一山の**大銀貨！　しかもそれが阿Qの所有 —— 現在ないのである！。
「第四章 恋爱的悲剧」	有人说：有些胜利者，愿意敌手如虎，如鹰，他才感得胜利的欢喜；假使如羊，如小鸡，他便反觉得胜利的无聊。又有些胜利者，当克服一切之后，看见死的死了，降的降了，“臣诚惶诚恐死罪死罪”，他于是没有了敌人，没有了对手，没有了朋友，只有自己在上，一个，孤另另，凄凉，寂寞，便反而感到了胜利的悲哀。然而我们的阿Q却没有这样乏，他是永远得意的	
「第四章 戀愛の悲劇」	よく人はこんなことを云ふ —— 勝**つ方で**は**相手が強ければ強いほど**勝利の**快味**を感**得するものであると。また、**若し相**手が弱くては**却つて勝利の無聊を**覺ゆるものであると。或はまた、**勝利者は一切**のもの**を征服し**盡して、**死ぬ**る**者は死し、降る者は降り、『生命ばかりはお助け下さい』などとやられてみ**ると、**さて今度は、**敵**手**が無くなり、**朋友**が**無**くなり、**唯我獨尊で、われ一人、まことに孤立、凄涼、寂寞を感じ、**却**つ**て勝利の悲哀を味ふものであると……。ところが、わ**が阿Qに**於て**は中々そんな**弱いことなどはない。**彼は**勝つていよいよ**どこまでも得意である。	よく人はこんなことを云ふ —— 勝**利者といふ者**は、**敵手が虎のやうに鷹のやうにあれかしと願ひ、それでこそ彼は**勝利の**歡喜を感じるのだ。**若し**羊のやうな小鷄のやうなものだつたら、**彼は却つて勝利の無聊を**感じる。又**勝利者**といふ者**は、一切を征服し**たあとで**死ぬ者は死**に**、降る者は降**つて『臣誠惶誠恐死罪死罪』とまつりあげられ**ると、**彼は**敵が無くなり、**相手がなくなり、友達**がな**くなり、たゞ自分だけが上にゐて、ひとりぼつちの別者になり、凄じく寂しく、却て勝利の悲哀を感じる。しかし我**が阿Qにはそんな**心配がなかつた。**彼はどこまでも得意である。
「第七章 革命」	“好，……我要什么就是什么，我欢喜谁就是谁。 得得，锵锵！ 悔不该，酒醉错斩了郑贤弟， 悔不该，呀呀呀…… 得得，锵锵，得，锵令锵！ 我手执钢鞭将你打……”	

	A、【国際プロレタリア叢書】 『支那小説集　阿Q正傳』 1931年10月、四六書院	B、『大魯迅全集』 1937年２月、改造社
「第七章 革命」	『どうだぇ！　俺のほしいものは何だつて俺のもんだあ……俺の氣に入つた女郎は誰奴だつて俺の思ふ通りなるだあ…… **ドンドン**、**ヂ**ヤン**ヂ**ヤン！ **今更**悔ゆる**も及ばず**、**一杯機嫌にまかせて**、**思はず一刀兩斷となつてしまつたが**……**今更**悔ゆる**も及ばず**、**あゝあゝあゝ**（**これは芝居**龍虎鬪**の中**の文句） **ドンドン**、**ヂ**ヤン**ヂ**ヤン、**ドン**、**ヂ**ヤン、**チ**ン、**ヂ**ヤン！ **名刀大上段に振りかざし**……』	『どうだぇ！　俺の欲しいものは何だつて俺のもんだあ……俺の氣に入つた女郎は誰奴だつて俺の思ふ通りなるだあ…… **タツタ**、**チ**ヤン**チ**ヤン！ 悔ゆる**に當らず**、**醉うて錯まり斬る**鄭賢弟、悔ゆる**に當らず**、**やあ**、**やあ**、**やあ**（**京劇**「龍虎鬪」の文句） **タツタ**、**チ**ヤン**チ**ヤン、**タツ**。**チ**ヤン、**リ**ン、**チ**ヤン！ **手に鋼鞭を執つて汝を打たん**……』
「第八章 不准革命」	赵司晨脑后空荡荡的走来，看见的人大嚷说， “嚄，革命党来了！” 阿 Q 听到了很羡慕。他虽然早知道秀才盘辫的大新闻，但总没有想到自己可以照样做，现在看见赵司晨也如此，才有了学样的意思，定下实行的决心。他用一支竹筷将辫子盘在头顶上，迟疑多时，这才放胆的走去。	
「第八章 革命に参加 させず」	趙司晨が辮髪を頂きに卷き上げて、**襟筋を變にげつそりさせながら**やつて來た。それを見た者が大聲ではやし立てた。 『ほ、革命黨が來たぞ！』 阿Qは**そ**を聞くと非常に羨しくなつた。彼は若旦那が辮髪を卷き上げなさつたといふ**大へんな噂を聞いて**ゐたが、自分が**その**眞似を**しようとは未だ**思はなかつた。今、趙司晨**のこの有様を**見ると、**急に自分も**眞似**してみたくなつた**。**彼は早速**實行**しようと**決心**した**。 彼は一本の竹箸**を頭の頂きに載せて、それに**辮髪を**卷きつけた**。**さうして大分**ためらつたが、思ひ切つて外に出て行つた。	趙司晨が辮髪を頂きに卷き上げて、**罌粟坊主を丸出しにして**やつて來た。それを見た者が大聲ではやし立てた。 『ほ、革命黨が來たぞ！』 阿Qは**それ**を聞くと非常に羨しくなつた。彼は若旦那が辮髪を卷き上げなさつたといふ**大評判は知つて**ゐたが、自分が眞似**してもいいとは更に**思はなかつた。今、趙司晨**もこんな風であつて**見ると、眞似**ようといふ底意が**實行**の**決心**を固めた**。彼は一本の竹箸**で辮髪を頭のてつぺんにまとめて、しばらく**ためらつたが、思ひ切つて外に出て行つた。

いわゆる直訳とは言えない箇所も散見されるが、山上が改訳に如何に真剣に取り組んでいたかがよく伝わってくる。改訳上の細かな修正はまさに枚挙に暇がないが、「町」をすべて「城下」に変更、擬音（声）語の再考、細かいところでは、「餘り」→「あまり」、「言ひ放つた」→「言ひはなつた」などの漢字と仮名の使用、句読点位置変更等々、非常に細心である。また、各章末に配する「注釈」が後の『大魯迅全集』の方では大幅に増補されている。[5]

実は山上はこの「阿Q正伝」翻訳に当たって、実際に魯迅から指導を受けていた。丸山昇「《未発表書簡》『阿Q正伝』日本語訳について」（『海』［中央公論社］1975年９月号）は、翻訳に当たって山上が魯迅に直接書き送った疑問に、魯迅が答えて山上に送った書簡と、同封された魯迅自身による「阿Q正伝」本文の詳細な注釈の書き付けを全文紹介したものである[6]が、そこからも山上が如何に真剣に取り組んでいたかが伝わってくる。

二人の邂逅について、丸山氏の論文から引用する。

山上の語るところによれば、「筆者と魯迅との交遊は民国十六年（一九二七）広東に於て初めて会ったに始まり、彼が上海に遷ると共にまた上海での交りとなって近年に及んだ（「魯迅の死と広東の思い出」、『改造』三六・一二）」という。「魯迅日記」には山上の名は二七年二月十一日に初めて出て来る。「十一日曇り。午前中敬隠漁より手紙、去年十二月二十九日パリ発。……午後山上正義来る……」[7]

山上自身は、「魯迅を語る ── 北支那の白話文學運動 ──」（1928年）の中で、件の「阿Q正伝」について次のように述べている。

『阿Q正伝』は彼の代表的傑作である。痴愚に近き一農夫の反省を傳記の形式で描いたもので、陰惨な救ひのない人生の一斷面が描かれてゐる。此の調子は『狂人日記』以後、彼の全部の作に共通なもので、彼自身ドストエフスキーに最も傾倒した時代であつたことを語つたが、ドストエフスキーの『貧しき人々』の一斷面でも讀む様な気持のするものである。

その作の傑作たるか否かは別としても、世界的に有名になつたことは事實である。『阿Q正伝』がエスペラント語譯を始めとして、英佛、獨、露の五國語に飜譯されてゐるし、ロマン・ローランが此の作を激賞したといふので一層有名である。（私も魯迅から直接、日本語に此の作を移す承諾を與へられて半分位進捗してゐるのであるが可なりの長篇であるのと、山西省邊りの土語が會話に頻出して頗る困難なので未だ完了しないでゐる）[8]

ここで、魯迅の故郷を山西省（実際は浙江省紹興）と誤解している[9]のはご愛敬として、既に翻訳に取り組む彼の意気込みがここからも窺える。

その後、1936年に至り『改造』「魯迅追悼」号でも、山上は前出「魯迅の死と廣東の想出」の中で改造社の『大魯迅全集』出版にも言及しつつ、次のように書いている、

……日本では改造社に於てその飜譯全集出版の計劃が既に出來上つてゐるといふから、我々はその出現の日の一日も速かならんことを待つだけである。

筆者と魯迅との交游は民國十六年廣東に於て初めて會つたに始まり、彼が上海に遷ると共にまた上海での交りとなつて近年に及んだ。數年前上海で彼の代表作**『阿Q正伝』の日本語譯の決定版を出したい**といふ彼の希望と、筆者が廣東以來その飜譯を決心し、既に廣東に在る時日本の『新潮』誌上にこの決心を發表した位であつたので、これが偶然一致し、彼の直接の指導の下に上海で筆者は飜譯を完了したのであつた。古典からの引用があつたり紹興地方の土語が飛出したりして相當難解なあの原文なので飜譯完了までに約一ヶ月半を要したが、魯迅はその間五十數回に亘つて筆者の譯語に對し意見を述べ原語の意味を傳へて呉れた。[10]

ここでは魯迅の出身地についても正しく「紹興」と改まっているが、彼は『大魯迅全集』の出版と、そこに収録される自己の「阿Q正伝」訳に強い自負を抱いていた。魯迅の“決定版を出したい”という希望に応えるためにも、不明な点は魯迅本人に逐一尋ねつつ、山上は精力を傾注して翻訳を完成させたのであった。

山上が『大魯迅全集』収録に当たって、如何に熱心に改訳に取り組んだかは、これまで見てきた

通りである。

最後に、当の改造社版『大魯迅全集』の側から、この翻訳「全集」の山上「阿Q正伝」を収める『第一巻　小説集』について確認しておきたい。

『第一巻　小説集』に挟み込まれた『大魯迅全集月報　第一號』（昭和十二年二月配本　第一回配本附録）掲載、佐藤春夫「第一巻の飜譯に就て」には次のようにある。ここには、翻訳について興味深い裏話が語られ、内実が垣間見られる。

> 第一巻小説集は譯者として井上、松枝、増田、山上の諸家に卑名も加わつてゐる。この五人の合譯に成るものである。合譯は愚案によつて一種獨特の方法を選擇した。乃ち各自自信のある既成の譯稿をさらに推敲した上でこれを先づ編輯會議に提出し、連名の各員は相互に他の譯稿を校閲し合つて忌憚なく加筆或は注意の記入によつて譯者の再考を促し合つた。各人皆一々之を原著と比較閲讀せぬはなかつたが、就中松枝氏は優秀の學力と學者的良心とを以て最も周密な忠言を各譯者に致された。本來松枝氏は既成の稿がなかつたために小説集には譯稿を提出されなかつたが編輯會議は氏の異常な努力に感謝してこれを譯者の一人として署名することに決した。（中略）最初の草稿の執筆者が松枝氏以外の四名であるために四名の文體に多少の異同があるのを不可として、その完成に當つて統一を期するに臨んで、井上氏の譯文が平易枯淡の妙は幾分品位と熱情との失われるものがあるとしても、達意を旨とする原著者の素朴な文體に近いのと、その量の多さとによつて、最も基本とするに適當と信じ、略この體に統一したが、諸篇の持つ獨自の内容に應じて原作にも自ら多少の異がある如く譯稿にもこれがあるのは寧ろ當然と思はれたので、強いて徹底的に統一しなかつたのは無論である。

同『月報』末尾「編集部便」でも、「阿Q正伝」が喧伝されている。山上も心で「快哉！」を叫んでいたことだろう。

> 第一回配本として第一巻「小説集」を御屆け致します。魯迅の最大傑作である『阿Q正傳』を含む「吶喊」篇と「彷徨」篇の二集の外に、「阿金」と「私の種痘」の短編二編を加へて五四十頁の大冊としました。（中略）松枝茂夫、井上紅梅、山上正義、増田渉、佐藤春夫五氏の協力責任飜譯です。

附：耿庸「胡風宛書簡」発見と楊逵の使用した版本についての補足

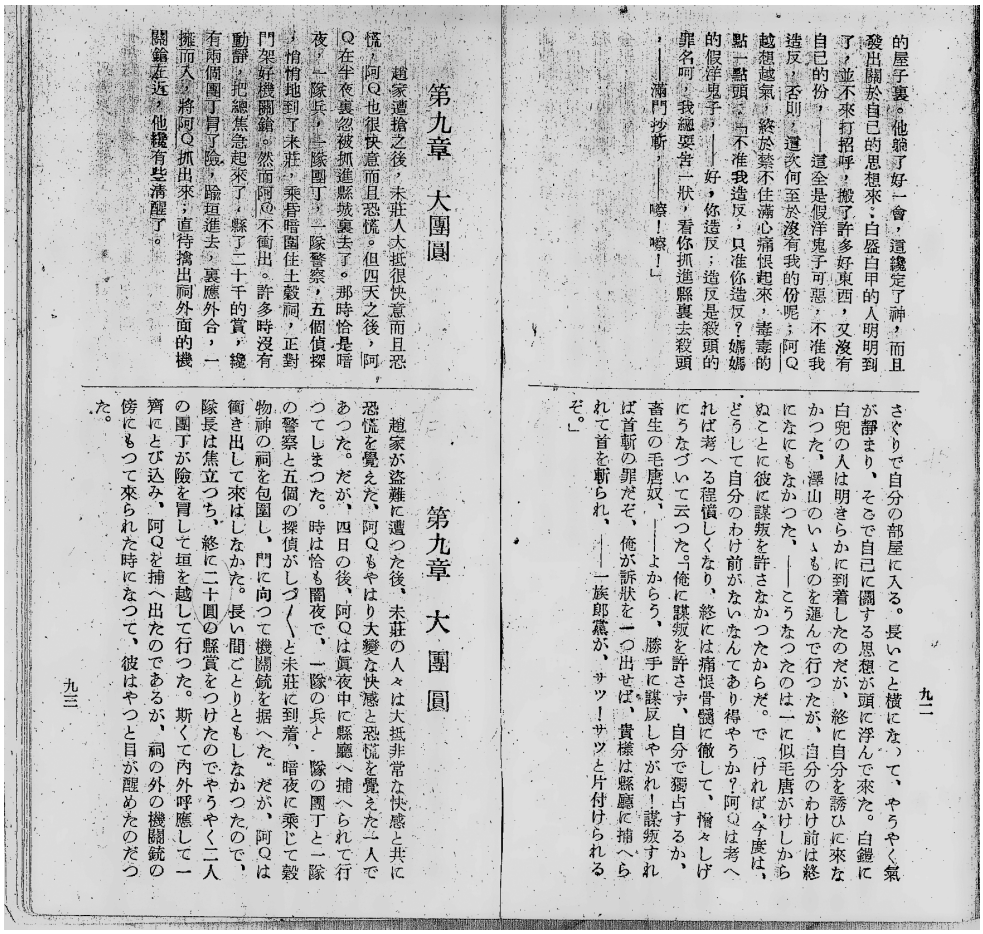
1934年10月、代表作「新聞配達夫」が、懸賞論文の第二席に入選（一席は該当なし）して雑誌『文学評論』第１巻第８号に掲載された、台湾人として初めて日本の中央文壇に名乗りを上げた楊逵（1906-1985）は、台湾で初めてかつ唯一の「阿Q正伝」翻訳の筆も執っていた。1947年１月（台北）東華書局刊、楊逵編「中日文對照中國文藝叢書」[11]『第一輯 阿Q正傳』である。それは、上段に魯迅の原文、下段に日本語訳を配したコンパクトなものである。

『“中日文対照”中国文芸叢書』とは、日本による統治が始まって10年後の1906年に生まれたいわゆる日本語世代の楊逵らが、戦後の国民党による接収、日本語禁止令（1946）下、新たな国語習得の必要に迫られた同胞たちのために企画したもので、優秀な文学の普及による文化振興を図る想い

もそこには内包されていた。こうして楊逵が「第一輯」に選んだのがほかでもない魯迅の「阿Q正伝」だったのである。

楊逵が中国語から日本語への翻訳に当たって主として参照した版本[12]が、通説のような改造社版『大魯迅全集』（1937年）ではなく、実際には増田渉訳の岩波文庫版『魯迅選集』（1936年）であったことは、前稿にて各版本を実際に対照しつつ明らかにした通りである。以下に一部を引用させて頂く。

以上見てきたように、楊逵の『阿Q正伝』翻訳は『大魯迅全集』を参照しつつも、実は増田渉訳「岩波文庫」の翻訳を大胆に取り込んだものであった。だが楊逵はなぜ自身「本格的に」魯迅を読むきっかけとなったと言明する『大魯迅全集』よりもむしろ「岩波文庫版」を採用したのだろうか。もちろんそこには台湾を代表する日本語「作家」楊逵の、訳文体自体の好みは介在したに違いない。『大魯迅全集』は往々にして訳し“過ぎ”ており、「直訳」を旨とする楊逵にはあまり馴染まなかったかもしれない。ただ筆者は、「岩波版」は“増田渉”訳であったことが影響を与



的屋子裏。他驕了好一會，這纔定了神，而且發出關於自己的思想來：白盛白甲的人明明到了，並不來打招呼，搬了許多好東西，又沒有自己的份，——這全是假洋鬼子可惡，不准我造反，否則，這次何至於沒有我的份呢；阿Q越想越氣，終於禁不住滿心痛恨起來，毒毒的點一點頭：「不准我造反，只准你造反？媽媽的假洋鬼子——好，你造反；造反是殺頭的罪名呵，我纔要告一狀，看你抓進縣裏去殺頭，——滿門抄斬，——嚓！嚓！」

九二

さぐりで自分の部屋に入る。長いこと横になって、やうやく氣が靜まり、そこで自己に關する思想が頭に浮んで來た。白鎧に白兜の人は明きらかに到着したのだが、終に自分を誘ひに來なかつた、澤山のいゝものを運んで行つたが、自分のわけ前は終になにもなかつた、——こうなつたのは一に似毛唐がけしからぬことに彼に謀叛を許さなかつたからだ。で、ければ、今度は、どうして自分のわけ前がないなんてあり得やうか？阿Qは考へれば考へる程憤しくなり、終には痛恨骨髓に徹して、憤々しげにうなづいて云つた。「俺に謀叛を許さず、自分で獨占するか、畜生の毛唐奴、——よからう、勝手に謀反しやがれ！謀叛すれば首斬の罪だぞ、俺が訴狀を一つ出せば、貴樣は縣廳に捕へられて首を斬られ、——一族郎黨が、サツ！サツと片付けられるぞ。」

第九章　大團圓

趙家遭搶之後，未莊人大抵很快意而且恐慌，阿Q也很快意而且恐慌。但四天之後，阿Q在半夜裏忽被抓進縣城裏去了。那時恰是暗夜，一隊兵，一隊團丁，一隊警察，五個偵探，悄悄地到了未莊，乘昏暗圍住土穀祠，正對門架好機關銃，然而阿Q不衝出。許多時沒有動靜，把總焦急起來了，縣了二千的賞，纔有兩個團丁冒了險，踰垣進去，裏應外合，一擁而入，將阿Q抓出來，直待擒出祠外面的機關銃左近，他纔有些清醒了。

第九章　大團圓

趙家が盜難に遭つた後、未莊の人々は大抵非常な快感と共に恐慌を覺えた、阿Qもやはり大變な快感と恐慌を覺えた一人であつた。だが、四日の後、阿Qは眞夜中に縣廳へ捕へられて行つてしまつた。時は恰も闇夜で、一隊の兵と一隊の團丁と一隊の警察と五個の探偵がしづ〳〵と未莊に到着、暗夜に乘じて穀物神の祠を包圍し、門に向つて機關銃を据へた。だが、阿Qは衝き出して來はしなかた。長い間ごとりともしなかつたので、隊長は焦立つち、終に二十圓の縣賞をつけたのでやうやく二人の團丁が險を冒して垣を越して行つた。斯くて內外呼應して一齊にとび込み、阿Qを捕へ出たのであるが、祠の外の機關銃の傍にもつて來られた時になつて、彼はやつと目が醒めたのだつた。

九三

楊逵編「中日文對照中國文藝叢書」『第一輯 阿Q正傳』（1947年1月、東華書局刊）

えたのではないかと考えている。（中略）　ところで、この「岩波文庫版」『魯迅選集』が台湾に流布していた可能性については、藤井省三氏がつとに指摘していた。氏の論文「佐藤春夫と岩波文庫『魯迅選集』」（2001）から。

> 一〇万部もの『魯迅選集』は海を越えて当時、日本植民地下にあった台湾・韓国にも普及していたものと推定される。（中略）箱入りの豪華本であったこの全集（『大魯迅全集』：引用者注）は簡単には購入できるものではなかったろう。（中略）経済的に恵まれぬ魯迅の読者にとって、廉価本の岩波文庫は福音であったろう。[13]

楊逵の「阿Q正伝」翻訳に関与する増田渉と台湾との関係、更には“台湾の魯迅”頼和を通した楊逵と魯迅との関係について、詳細は前稿をご参照願いたい。

さて今回、楊逵が「阿Q正伝」翻訳に使用した版本に関連して、新たな資料が発掘された[14]ので紹介したい。それは、耿庸（1921-2008）の「胡風[15]宛」書簡（1949年１月５日付）である。以下にその全文を挙げる。

胡先生：

曾托由温枫转上一信，不知收到了没有？

现在，和这信同时，寄上《送报伕》和**《阿Q正传》**的**中日对照本**各一册。容易看出毛病的，譬如后一册吧，**因为所用的原文是根据一折七扣书的《鲁迅选集》**（这里竟然只有这类书），里面错字讹句多，加上由于译者的中文程度不十分行，结果可想。同时，受了印刷方面能力的限制，也显得不像样儿。

这一套小丛书，据说，出版者是颇抱有希冀的：新近的一年内要出齐24本，除已出的这两本外，在排校中的有郭沫若、茅盾和郁达夫的各一册。译者的手头存书是些徐志摩之类的大作，倘使依而这么译了下去，中国文艺不免走样的吧。经过洽谈，要译新的作品了。已介绍一篇**《第七连》**，还想给一篇**《蜗牛在荆棘上》**，不料找不到原书了。**力兄**的小说集也不知去向（刚来时给人借去一堆书，终于都讨不回来）。我想，这种作品的介绍，对于台湾的文艺应当有好的意义的吧，那么，您提供一点意见，并且介绍些可以译过来的作品，如何？

译者似乎原只想译小说的，现在可以扩充些，诗和理论的也要了。因此，**那篇过去的在文协年会的报告**用得着，但，我想，或者还有更恰当的么？**绿原的《终点……》**的那期《希望》（第四期）恰好没有，也盼寄一册来。

此外，曾说过的副刊是专候稿子集得有了两三期才编，现在却只有一两篇短文章，也请尽快地寄些来。

也愿来台湾玩玩否？倘住乡下，房间是有的，城里却还得想法子，台静农先生那边该有空余的房间。

祝

大安　　庸一月五日

（横地剛氏による注：**《第七连》**为丘东平的短篇小说集。**《蜗牛在荆棘上》**为路翎的中篇小说。**“力兄”**指杨力（贾植芳），他的小说集《人生赋》与以上两篇均被胡风编入〈七月文丛〉出版。**“那篇过去的在文协年会的报告”**指胡风的论文〈文艺工作底发展及其努力方向〉。**“绿原的《终点**

……》”即绿原的长诗《终点，又是一个起点》，载《希望》第一集第四期。）

福建出身の耿庸は福建や上海で雑誌や新聞の編集に携わる過程で胡風と知り合い、胡風の主催する雑誌に雑文を発表したことがあるという。その後、1947年に台湾に渡り、やはり新聞の編集者として活動する中で、恐らくは福建語（台湾語に近い）を使用することなども縁となって楊逵と出会い、活動を共にするようになったと推測される[16]。胡風に向けて、上述の楊逵編「中日文對照中國文藝叢書」『新聞配達夫』と『阿Q正伝』を送って、台湾へ紹介する大陸作品の推薦を求めているのもそうした事情による。なお、耿庸自身、後に『「阿Q正伝」研究』（1953年）を出版してもいる（後掲「略歴」参照）。

ここで耿庸が、楊逵訳『阿Q正伝』について以下のように記すのは注目される。

……《阿Q正传》的中日对照本各一册。容易看出毛病的，譬如后一册吧，因为所用的原文是根据一折七扣书的**《鲁迅选集》**（这里竟然只有这类书），里面错字讹句多，加上由于译者的中文程度不十分行，结果可想。

楊逵の『阿Q正伝』訳は問題が多いが、それは“一折七扣”（一般的には“七折八扣”か。売れずに大いに割引した、大廉売。）で、内容も極めて劣悪な『魯迅選集』を使用した上に、訳者（楊逵）の中国語（普通話）能力不足に依ると断定するのだ。耿庸は楊逵より15才も年下だが、このように直言することからも楊逵との親交が窺われるかもしれない。

さて耿庸の指摘する、楊逵が「阿Q正伝」翻訳に使用した版本は、ここで『魯迅選集』と明言されている。改造社版『大魯迅全集』（1937年）でなく、増田渉訳の岩波文庫版『魯迅選集』（1936年）使用「説」を支持するものと見做せよう。ただ、日本内地及び植民地において大いに人口に膾炙した岩波『魯迅選集』がそれほど粗悪なものであったかどうか、ひいては増田の訳文如何の問題についてはひとまず保留としたい。

以下に、横地剛氏の調査による【耿庸（本名：鄭炳中）略歴】[17]から引用しておく。

1921年　印度尼西亜スマトラ生、澎湖人。
1937年　廈門双十中学高級新聞科卒。
1938年　福建、上海にて各雑誌新聞の編集に携わる。胡風《希望》に雑文を発表。
1945年　１月、中華全国文藝界抗敵協会に参加（聶紺弩の紹介による）。
1947年　９月台湾へ。『公論報』編輯。
1949年　５月末離台、香港へ。11月大陸に戻る。廣東で《新商晩報》副総編輯。
1950年　上海に戻る。
1951年　周刊『展望』編集、震旦大學教員などを務める。
1952年　11月より《阿Q正伝》研究開始。
1953年　３月、《“阿Q正伝”研究》出版。
1955年　５月15日、胡風事件に連座して逮捕される。
1966年　３月、夫人王皓が毛沢東に直訴。釈放。
　　上海辞書出版社編集委員、上海科技大學客座教授などを務める。
2008年　１月19日逝去。

さて最後に、この「耿庸1949.1.5『胡風宛書簡』」新発見の経緯を見ておきたい。それは胡風の蔵書から長女張暁風氏が発見したものであった。張暁風「神交五十年相見在九泉」(『随筆』1987年第５期）より、関連部分を引用する[18]。

前些日子，我在清理父親的日文藏書時，忽然發現兩本台灣出版的袖珍本小書。一本是日文的《楊逵小說集・鵝鳥の嫁人》(即《鵝媽媽出嫁》)，扉頁上簽著「敬贈胡風先生。楊逵」；另一本是中日文對照的《楊逵小說集・新聞配達夫》(即《送報伕》)，扉頁上簽的是「煩樓憲先生送胡風先生。楊逵」兩本書都是一九四六年出版的，距今已有四十個年頭了。紙已發黃，變脆，簽名的鋼筆墨跡更是褪了顏色，但字跡還是清晰的。

楊逵先生是台灣著名的愛國作家，早年就曾被日本統治當局逮捕坐牢十多次。在三〇年代初期用日文寫作（台灣人民在日本統治時，報刊書籍都必須用日文）的中篇小說《送報伕》是他的成名代表作，它寫出了在日本統治下的台灣同胞的深重苦難和覺醒。一九三五年，胡風在日本的《文學評論》上看到了這篇作品，搶著閱讀了，受到了感動。為了使更多的讀者能夠看到它，胡風趕快將它譯成了中文，投給當時暢銷的《世界知識》發表了。後來，連同另一位台灣作家呂嚇若的小說《牛車》一起，收進了胡風的翻譯小說集《山靈》，一九三六年由巴金辦的文化生活出版社出版了。

這本小書到底是經過什麼途徑到了父親手中的呢？……很偶然地，在和耿庸叔叔的一次閑談中，我提到了此事，他便說出這本書是他從台灣寄給我父親的。我查了查家中收存的信件，果然，耿庸於一九四九年一月五日給胡風的信中寫道：「現在，和這信同時，寄上《送報伕》和《阿Q正傳》的中日對照本各一冊」。

台湾史・台湾文学、また中国文学とりわけ胡風の周辺も丹念に調査を進められていた横地剛氏は、遺稿の中で、次のように説明されている。

楊逵とも耿庸は面識がある。二人の交友を示す書籍と耿庸の胡風宛書簡が胡風蔵書から発見された。二〇年も前のことになるようだ。楊逵著『鵞鳥の嫁入』（三省堂台北支店、一九四六年三月）と楊逵著、胡風訳『新聞配達夫』（台湾評論社、同年七月）には楊逵のサインがあり、後者には「煩楼憲先生送胡風先生／楊逵」と記してある。書簡は一月五日（一九四九年）付となっている。楊逵、胡風、耿庸、楼憲（尹庚）、さらには黎烈文との交友を示す貴重な資料である。胡風の長女張暁風の「神交五十年相見在九泉」（『随筆』第五期、一九八七年）によれば、楼憲に転送してもらうべく本を用意したが、『和平日報』の騒動で彼が離台したため間に合わず、手元においていたところに耿庸が現れ、代わって転送してもらったという。実は耿庸は楼憲の勧めで来台し『公論報』の編集に携わっていた。楊逵を紹介したのも彼だろう。二度目に会ったとき、本を二冊預かったという。それ以前、楼憲は胡風に『山霊』を託され楊逵に届けたことがある。収録された胡風の訳文をそのまま附して中日対照本としたのが贈られた台湾評論社版である。それを切欠に二人は協力して『和平日報』の編集に当たった。

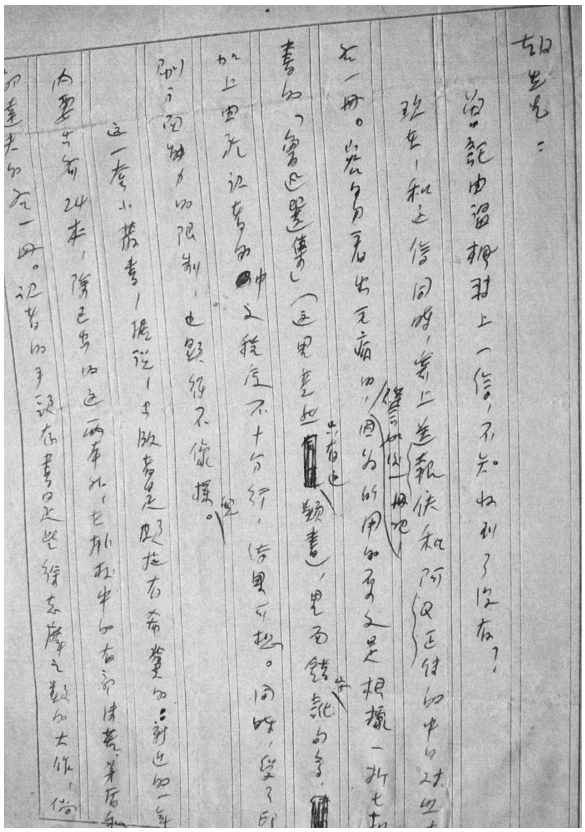
書簡には『新聞配達夫』と楊逵訳『阿Q正伝』（東華書局、一九四七年一月）を送ると記してあるが、『鵞鳥の嫁入』にふれていない。范泉の手元には、一九四六年中にサイン入りの同書が届いていることからすれば、恐らく胡風にもその時期に別便で届いていたはずだ。書簡にはその『阿

Q正伝』について、底本が廉価本であり、誤字が多い上に訳者の中国語の水準が低く、その上印刷技術が劣り、「体を成していない」と言及しており、耿庸が預かったもう一冊は『阿Q正伝』に間違えないだろう。[19]

横地剛氏遺稿、上掲【耿庸略歴】の末尾に、彼自身による幾つかの課題が箇条書きにて記されているが、例えば楊逵訳『阿Q正伝』について、

> 楊逵訳『阿Q正伝』の訳出した『魯迅選集』についてのコメントが耿庸の書簡にある。出版社及びその＜一折七扣＞の誤字脱字を検証しなくてはならない。
>
> さらに、中日対訳本の計画が24冊あったことが伺える。これも貴重な証言である。

楊逵、胡風それぞれ、政治的に複雑な事情もありいまだ闡明に至らぬ問題点も多いようだ。横地氏の「課題」は、私たちそして後の世代に託された。横地剛氏の生前の偉業に想いを馳せつつ、まずは本稿の筆を置きたい。



「耿庸1949.1.5『胡風宛書簡』」（三葉のうちの第一葉）

追記：本研究は、JSPS 科研費18K00355の助成を受けたものである。

注

1　横地剛氏（1943-2020）は、中国史研究家。福岡貿易（株）代表取締役。東京外国語大学中国語科卒。著書に『南天の虹』（2002年、台湾人間出版社）、『上海を見ていた墓』（2018年、藍天文芸出版社）などがある。横地氏は内山書店店員として魯迅とも関係があった鎌田誠一（福岡県糸島市出身）の調査などを通して筆者とも交流があったが、生前、本稿に引用させて頂いた耿庸「胡風宛書簡」や関係資料を、研究に役立てて欲しいと筆者に託された。2019年７月２日の横地氏からのメールに次のようにある。「資料は胡風の娘・張暁風さん提供です。公開する許可はとってありますので、どうぞご利用ください。貴兄の楊逵譯「阿Ｑ正伝」の研究に役立ててください」。まずは本稿をもって、長年にわたって中国研究に邁進された横地氏への筆者からの感謝と追悼の気持ちを表したい。

2　張明敏氏との共著「一台湾作家の訳した魯迅 ── 楊逵編「“中日文対照”中国文芸叢書」『阿Ｑ

正伝』をめぐって」(『野草』第101号　25〜49頁　中国文芸研究会　2018年10月)。

3　丸山昇『ある中国特派員　山上正義と魯迅』(1976年、中央公論社)、169、171頁。増訂新版(1997年、田畑書店)、224、226頁。

4　山上が参照した「阿Q正伝」原文の版本について現段階では確定できていないので、ここでは取りあえず、現行の『魯迅全集』(2005年、人民文学出版社)に依った。

5　「阿Q正伝」には所謂“土語”が多出するが、山上の訳文には“九州弁”が多用される(九州福岡出身の筆者ならではの気付きと言えようか)。山上正義は鹿児島市の出身で、鹿児島高等農林学校林学科を卒業、鹿児島県の農林技手をしていたらしい。その後バプテスト教会で洗礼を受ける。東京に出た時期は明らかでない。山上正義その人、魯迅との関係の詳細について注3にも引く丸山氏の専著を参照した。

6　同論文で丸山氏は、山上が最初に翻訳を掲載した【国際プロレタリア叢書】について次のように解説している。「この訳は、林守仁の筆名で『支那小説集　阿Q正伝』と題し、「国際プロレタリア叢書」の一冊として、三一年十月五日、四六書院から刊行された。『阿Q正伝』のほか白川次郎(尾崎秀実)の緒言「中国左翼文芸戦線の現状を語る」と、林=山上の「魯迅とその作に就て」、それにこの年の二月、国民党政府によって銃殺された、いわゆる「左連五烈士」のうち、胡也頻、柔石、馮鏗の三人及び左連初期に活躍した戴平万の短編各一篇と、四人の「小伝」を収めている。／『阿Q正伝』の邦訳は、上海の日本語紙『上海日日新聞』に井上紅梅訳が連載されたのがもっとも早いものらしいが、私はまだ見ていない。井上の訳は二九年十一月雑誌『ぐろてすく』(文芸市場社)に「支那革命畸人伝」として掲載され、これが国内における最初の『阿Q正伝』の翻訳である。ついで満鉄の外郭団体であった中日文化協会の『満蒙』が三一年一月から五月まで長江陽訳で「阿Q正伝」を連載する。／こうした後を受けて、三一年秋に、『阿Q正伝』の訳が二冊、初めて単行本として出版された。一つが松浦珪三訳『阿Q正伝』(三一・九、白揚社)もう一つがこの林守仁訳『阿Q正伝』であった。」

7　丸山昇「《未発表書簡》『阿Q正伝』日本語訳について」、258頁。

8　山上正義「魯迅を語る ── 北支那の白話文學運動 ──」、1928年3月『新潮』第二十五年・第三号、100頁。

9　実は山上は同文章中の他の場所でもわざわざ、「周樹人は山西省某縣の人、……」と書いており、何かの誤った記事に基づくのやもしれない。

10　林守仁(山上正義筆名)「魯迅の死と廣東の想出」、『改造』1936年12月号(特集「魯迅悼惜」)、125頁。

11　第1輯の『阿Q正伝』に続き、第2輯「茅盾『大鼻子的故事』」、第3輯「郁達夫『微雪的早晨』、第4輯「沈従文『龍朱』」、第5輯「鄭振鐸『黄公俊的最後』」(未出版?)、第6輯「楊逵著、胡風訳『送報伕』」が、1949年1月に至る二年間に出版されている(以上、台湾国家図書館等蔵。筆者はすべてを入手できているわけではなく、魯迅以外の訳業については課題としたい)。その間の楊逵は、まず第1輯『阿Q正伝』出版(1947年1月)後すぐに発生した二二八事件後に拘束され8月まで入獄。1949年4月6日に再度逮捕されて後は、十二年間の獄中生活を強いられ、この計画も途絶を余儀なくされる。

12　では、楊逵が使用した“中国語”原本は何か? 頼和が1925年11月29日〜12月27日、1926年1月10日・1月17日・2月7日に『台湾民報』第81〜85・87・88・91号に連載した「阿Q正伝」を楊逵はきっと注視していたと考えられるが、それは「第6章」までで中断しており完全では

ない。ただ、楊逵の翻訳は1947年なので、ある程度自由に大陸の書籍を入手できたのかもしれない。

13 『アジア遊学』25号「特集 東アジアが読む魯迅」(2001年３月、勉誠出版)、145頁。

14 前注１、横地剛氏からの提供による。

15 【胡風（1902～1985）略歴】：1925年、清華大学英文科入学。1929年、日本留学、東亜高等予備校を経て、1931年、慶應義塾大学文学部英文科入学。プロレタリア科学研究所芸術部会に参加。また中国左翼作家連盟東京支部に参加。／1933年、反日運動のかどで逮捕、中国に強制送還される。帰国後は、上海で左連宣伝部長、小説やソ連の社会主義理論の執筆紹介に従事。／1936年、翻訳短編小説集『山霊』を発表、朝鮮や台湾における反植民地闘争の様子を紹介した。／1937年、改造社版『大魯迅全集』編集に参加。／1938年、日中戦争下、中華全国文芸界抗敵協会の常務委員に就任。10月に武漢、12月に重慶に移り、復旦大学教授を兼ねる。詩集『為祖国而歌』、エッセー集『棘原草』、文芸批評論文集『剣・文芸・人民』、『論民族形式問題』、訳文集『人与文学』などを発表。1945年、同人誌『希望』を創刊。文芸批評論文集『為了明天』を発表。／1948年、『論現実主義的路』等を出版した。1949年１月、遼寧省の解放区に入って共産党の運動に参加。／1949年10月、中華人民共和国建国。中国文学芸術界連合会委員、中国作協全国常委等を歴任。抒情長詩『時間開始了！』、特写集『和新人物在一起』、エッセー『従源頭到洪流』、長詩『為了朝鮮・為了人類』などを発表。文芸評論家としても活動、人民文学出版社から『胡風評論集』３巻を出版。／1952年、文芸整風運動の一環で人民日報に批判される。／1954年９月、台湾に亡命していた胡適が批判され、胡適思想批判が始まる。関連して胡風は『文芸報』編集部や党の文化官僚を批判、袁水拍や周揚が胡風に反論する。毛沢東は胡風を反革命分子と認定、1955年５月16日に逮捕された。1980年、名誉回復。(『中国文学家辞典』［1985年、四川文芸出版社］、『ウィキペディア』［2021年10月23日］等参照。)

16 横地剛氏より送られた遺稿「張献忠は失敗したとたん、手当たりしだい人を殺した――二・二八事件と四・六事件の谷間」等による。横地氏発表論文の掲載誌などは未詳。

17 掲載誌などは不明。前注１、横地剛氏より筆者に直接送られた遺稿による。

18 暫時、横地剛氏遺稿からの孫引きによる。

19 同注17、横地氏論考による。その内容について詳細は、待考。